

花 き

実 況

1 キク

奥越地区では、昨年11月29日にJAテラル越前キク部会研修会、12月13日に「奥越地域キク生産者研修会」が開催され、46名の生産者が参加した。

7月植え寒菊は、12月15日がほぼ最終の出荷となった。

秋植えギクは積雪がほぼなく（大野市富田、1月15日現在）、昨年同時期が60cm、一昨年47cmで、例年より消雪がかなり早くなる見込み。昨年度の出荷が6月8日であり、本年度は昨年より早まる可能性がある。夏秋ギク親株の古枝切りは11月30日、冬至芽の摘心作業は1月中旬から実施されており、1月上中旬で大部分の株での処理が終了した。

坂井地区では、夏秋ギク親株の冬至芽の摘心は行わず、トンネル被覆が行われており、草丈は5～7cmで、白さび病が少発生している（写真1）。施設栽培の秋植えギクは、12月定植で一部活着不良。

病害虫として、一部でアザミウマ類の被害が見られる（1月11日調査）。

福井市東郷では、夏秋ギク親株は、昨年収穫後の切下株を8～9月に台刈りを行い、11月に株ごとハウスに定植した。1月中旬に草刈り機を用いて台刈りを行う予定である。

丹南地区の越前町では、夏秋ギクの親株は、昨年収穫後の切下株をハウス取り込み前に台刈りを行い、10月にハウスに定植した。12月中下旬にかけては古株整理を行った。8月咲きの品種については、摘心は行わない。

越前市では、夏秋ギク親株は、昨年9月終わりに台刈りを行い（平年は収穫後～9月上旬に実施）、11月に株ごとハウスに定植した。芽立ちが少なければ、2月から摘心を行う予定である。

二州地区では、盆ギクの親株における1回目の摘心が終了した（1月11日調査）。

若狭地区では、盆ギクの親株ハウスで、アブラムシが少発生している。

寒ギクでは、7月中旬定植の「冬一番」、「寒桜」、「新年の美」は収穫終盤になっており、例年より早い（1月15日調査）。



写真1 親株に罹病した白さび病

2 スイセン

スイセンの出荷ピークは、12月上旬となり、昨年度よりやや早めである（昨年：12月上中旬）。1月9日現在の出荷量は72万本（昨年：1月10日現在で91万本）で、昨年よりやや少なめである。昨年12月から今年1月にかけて、水仙まつりが各地で開催された。

3 ユリ

坂井市春江町のオリエンタルは、無加温 2 重ハウスで栽培された「クリスタルブランカ」(定植 10 月 18 日)は加温の遅れもあり、1 月出荷になった。10 月上旬定植の「エルディーボ」は草丈 39 cm、花蕾数 6 輪前後だが、低温障害が見られた。

4 ストック

坂井地区では、あわら市の 3 月出しストックは草丈 54 cm で出蕾始め、生育は早めで推移している。夏播き秋冬どりのアイアン系(アーリーアイアン系、ホワイトコランダム)は、毎週水曜日だけの出荷が行われている。出荷量は、箱で 70 ケース程度、ハトロンで 15 束程度である。ホワイトアイアンの一部に花飛びが見られるが、原因は不明。凍害による葉先の枯れは微発程度である。

病害虫として、圃場によって差があるが、コナガが少発生程度、菌核病、半身萎凋病が部分的に少発生している。

南越地区のカルテットシリーズは、8 月 20 日～9 月 20 日頃にかけて直播された。8 月 20 日頃に播種された品種は収穫がほぼ終わっている。8 月末に播種された品種は草丈が 80 cm (昨年: 65～79 cm)、収穫後半から終りに近い(昨年: 収穫はじめから収穫 2、3 割)。9 月 10 日頃播種の品種では、草丈 82 cm (昨年: 56～64 cm)、摘心済みで蕾は 10 mm 程度であるが、収穫には至っていない(昨年: 摘心済みで収穫近し)。

二州地区では、9 月上旬播種、9 月 25 日定植の品湯で、開花が始まっている。

若狭地区では、9 月上旬に直播されたカルテットシリーズで、開花が始まっている。10 月中旬直播の株は草丈が 30～45 cm、摘心が済んでいる段階で、例年より生育は早めである。

5 トルコギキョウ

あわら市のトルコギキョウが、「ロベラ」「レイナ」シリーズが 8 月上旬に定植され、ほぼ収穫が終わった。

病害虫として、オオタバコガの食害痕が見られた。

越前市のトルコギキョウでは 9 月中旬に播種、11 月中旬に定植された「ボヤージュグリーン」、「フルフル」等において、ビニールトンネル被覆が行われている。展開葉は 3～4 対である(1 月 15 日調査)。

6. その他

あわら市のキンギョソウ(3 本仕立て)は「アスリートレッド」が草丈 118 cm で開花終わり、「アスリートピンク」は草丈 126 cm で開花は 1 月中下旬の見込み、「アスリートイエロー」は 138 cm であり、開花はやや遅めである。

病害虫として、一部にアブラムシ類の被害が見られる。

福井市および永平寺町のハボタンは、12月10日に目揃え会（昨年12月11日）、12月15日～12月26日（昨年：12月11～12月27日）まで出荷。出荷量1万4千本（昨年1万2千本）であった。（1月16日調査）。

対 策

1 8、9月咲きギクの親株管理と採穂

- 1) 8月咲きの「小鈴」等生育が悪く、芽立ちが悪いなどの場合、1月下旬から2月上旬にかけて、地際部より3～5cm（葉3、4枚）を残して冬至芽の摘芯を行う。芽立ちのよい品種では地際部で、芽立ちの悪い品種は地際からやや上がった部位で一斉に摘心（刈り込み）する。
- 2) 挿し穂は摘心をしないで冬至芽をそのまま利用すると、心止まり症状や生育開花が不揃いとなる。また、夏ギクは親株時に高温に遭遇すると挿し穂苗の開花が早まるため、ハウス内が高温にならないように換気の励行を行う。
- 3) 作業時期目安

作 型	定植日	仮植期間	挿し芽日	冬至芽摘心日
仮植育苗の 8月咲き	4/15	3/25～4/14 摘心4/1～4/5	3/11 15℃温床育苗	1/25～2/5
8月咲き	4/15	—	3/26	2/5～2/15
9月咲き	5/15	—	4/30	3/10～3/20

※仮植育苗は8月咲きの「山手白」、「広島紅」、「夏晴」などの旧盆に間に合わない品種に利用する。

2 親株の病虫害防除

- 1) 苗による本圃への病虫害の持込みを防ぐため、病虫害の防除を徹底する。
新芽の伸長が始まってからは、週1回の防除を励行するとともに、晴れた日には十分に換気し、白さび病等の病害発生を抑制する。
- 2) 散布は晴れた日に行い、夜間までに植物体に散布した薬液が乾燥していることがのぞましい。
- 3) 床と通路へのモミガラマルチにより、土壤水分を保持し、灌水回数を減らす。

白さび病が発生していない親株は、ジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブル、ステンレスなどを週1回定期散布する。発病している場合は、病斑（冬孢子堆）のついた葉を取り除いてからチルト乳剤25（EBI）、ピリカット乳剤、ストロビーフロアブル等の治療剤を散布する。感受性が低くなった（効果が低くなった）薬剤は使用しない。また、効果がある薬剤であっても、同系統剤の連用で効果が低下しないように、異なる系統剤をローテーションで散布し、同じ薬剤や同系



写真2 親株についた黒さび病

統剤をしばらく使用しない。

親株搬入時に黒さび病（写真2）がみられた場合は、罹病葉を除去し、ステンレス等を早い時期に散布する。摘心後の新茎葉への感染を抑制するため、新シュートが出始めたステージ以降、週1回予防剤を散布する。

3 トルコギキョウの育苗管理

- 1) 播種から子葉展開後まではしっかり灌水する。本葉が展開するまでは、乾燥させないようにする。
- 2) 晴天時は乾燥しやすいので、ミスト灌水の場合はこまめに散水し、用土表面の乾燥に注意する。底面給水では、過湿になりすぎないように、過剰な水を排水できるようにしておく。灌水は日中の暖かいときに行い、冷たい水を灌水して根を冷やさないようにする。
- 3) 空中湿度が低いと苗（葉）がなかなか大きくなる。温風暖房機等で加温している場合は、床への灌水等により湿度を保つように工夫する。
- 4) 発芽後、本葉が重なると軟弱徒長や病害の原因になるので、苗の生育状態に応じて、早めに間引きする。
- 5) 定植した苗については、過湿圃場では接地面から白絹病が発生するため、表土が過湿にならないよう心掛ける。
- 6) 県内の冬季の日照は、トルコギキョウの生育にとって十分でないため、トンネル被覆等を行っている場合は、光が十分あたるように留意する。

4 スイセンの開花後の管理

- 1) 露地の栽培で12月にそさい5号を20 g/m²施用した圃場には、再度2月上旬にそさい5号を20 g/m²施肥する。
- 2) 12月に施肥を行ってない圃場では、消雪後、2月上旬にそさい5号を40 g/m²施肥する。水が入る圃場では、排水対策を徹底し、2月上旬と中旬に分肥してもよい。畝間に水が停滞しないように、排水対策もしっかり行う。
- 3) ハウス栽培で12月にそさい5号を20 g/m²を施用した圃場には、切り花採花後の球根を肥大させるため、そさい5号を2月上旬までに20 g/m²施肥する。12月に施肥を行ってない圃場では、2月上旬までにそさい5号を40 g/m²施肥する。ハウスの温度管理は、10℃～25℃の範囲で管理する。

アメダスのデータ



